

角川里の自然学校の地元学・酒田市中野俣「ふるさと発見塾」

須藤 亜希子（東北芸術工科大学歴史遺産学科一年）

今石みぎわ（東北芸術工科大学大学院博士課程三年）

取材者プロフィール

はじめに（自己紹介）

須藤：大学に在籍し、民俗学を勉強しています。出身は青森県の大鰐町なのですが、ご他聞にもれず、ここにも過疎化、少子化、高齢化の波が押し寄せ、町は財政難に陥っています。大学を卒業して地元に戻ったときに自分はそこで何ができるのか、民俗学や地域学の考えかたを取り入れながら模索していきたいと思い、参加しました。



今石：大学院に在籍し、民俗学を専攻しています。村でかつておこなわれていた具体的な暮らしぶりを聞き書きという手法を中心に再構成していくことで、過去から学び、現代的な問題に取り組んでいくことを目指していますが、現実におこっている切迫した問題——過疎化や高齢化、少子化、里山の荒廃や獣害などの環境問題——に対して、自分は具体的にどう対処できるのか、ずっと考えてきました。また、村の生活では生業の技術や知恵、知識、思想、信仰、組織、環境風土などいろいろな要素が分かちがたく結びついているのに、その一部だけを恣意的に取り出すことで果たして村の何がわかるのだろうか、という疑問もありました。そういったなかで、地元の生活者が主体となって幅広い活動を繰りひろげている角川の地元学や酒田市のふるさと発見塾が、いったいどのような仕組みのもとでおこなわれ、その結果どのような変化が生み出されているのか、とても興味を持ちました。



1. 角川里の自然学校

団体データ

名称	角川里の自然環境学校 (つのかわさとのしぜんかんきょうがっこう)
住所・連絡先	〒999-6403 山形県最上郡戸沢村大字角川 481-1 戸沢村農村環境改善センター1F TEL 0233-73-8051 fax 同左 ホームページ http://www3.ocn.ne.jp/~satoweb/
会員数など	地域の住民等 200 名
主な活動分野	里の暮らしを中心としたふるさと学習活動、里地里山保全活動、地域を再発見する地元学ぶ地元学活動

活動の趣旨と概要

角川における地元学の活動は、地元の人たちと外部者であるヨソモノがともに地域を学ぶという趣旨で行なわれます。地元の人たちは自分たちの暮らす地域をヨソモノと一緒に歩き、ヨソモノの目を借りながら、生活の一部である当たり前の風景のなかに地域の生活の知恵や独自性を発見し、再認識することを目指しています。

私たちが参加した地元学では、主催者、地元の大人や子供達、外部参加者がいくつかの班にわかれて活動をおこないました。班分けの際には地元の参加者に何人かの外部参加者がつくというかたちでかならず地元の人とヨソモノとが一緒になり、その班ごとに地図などを持って村を歩き、目についたものや聞いた話などをカードに書き込んでいきます。その後、調べたことを各班で整理してまとめ、みんなの前で発表することで情報を共有します。



活動の日程と参加者の声

その内容を具体的に説明すれば、たとえば1月12日～14日までのおもな日程はつぎのようになっています。

1月12日（土）昼食

班ごとに「あるもの探し」
懇親会（夕食）

1月13日（日）班ごとに「あるもの探し」

昼食

「あるもの探し」の整理と発表

1月14日（月）里山トレッキング



角川では、山形大学の授業の一環としてフィールド実習の学生を受け入れたり、また「里地里山プランナー養成講座」を開講して受講生を受け入れているのですが、今回は山大学の学生やプランナー養成講座の参加者たちが合同で参加していました。

活動は昼食をいただくことからはじまりました。食事は地元の食材を使って地元のおかあさんたちが作ってくれたものです。たくさんのおかあさんたちが忙しく働いているすが



たを見て、この地域学が多くの人々の協力の元に成り立っていること、つまり、地元にしつかりと密着していることにまず驚かされました。食事の前にはおかあさんたちがひとつずつ料理の説明をしてくれましたが、山菜やきのこ、川魚など、料理はどれもおいしく、はじめて食べるような珍しい食材もあったので参加者にはとても好評でした。まず舌（味覚）でもって地域を感じる場所から地元学をはじめるとするのは、とても興味深いものだと思います。

その後、ヨソモノと地元の人たちが協力して「あるもの探し」をおこないました。これは班ごとに地元を実際に歩き、ヨソモノが目についた疑問について地元の人に聞くというかたちでおこなわれます。写真は最初にお参りした神社で、その縁起について山の学生が地元の人に尋ねているところです。奥の学生が手に持っているのが調査カードで、ここに聞いたことを書き込み、また写真を撮ってあとで貼ってカードを完成させます。つぎに訪ねたのが早坂与右エ門さんという旧家で、ここで昔の道具を見せていただきながらいろいろと説明をうかがいました。写真は養蚕のためのマブシで、かつて、村で養蚕がさかんだったころの話などもお聞きすることができました。こうして実際の道具を手にとりながらお話を聞くことによって、こちらに知識がなくとも、より具体的にかつての生活を想像し、村の人と共有することができるようになりました。道具類もさることながら、与右エ門さんのお宅ですばらしかったのは座敷に飾られた小正月のダンゴです。今はこんなに大きなダンゴを飾る家はあまりないということで、山からとってきたミズキの木にさしたダンゴがいかに華やかでした。私たちの班には地元の子供たちも参加していましたが、彼らもこうした年中行事についてはあまり知らないようで、大きなダンゴをみてとても驚いていました。こうした活動に参加することにより、子供達が地元に興味をもち、自覚的になるのはとてもよいことだと思います。



翌日 13 日も同じ班にわかれて地元を歩きました。私たちはふたたび与右エ門さんのお宅を訪ね、与右エ門さんのおばあちゃんにかつての村の暮らしについてお話を聞くことができました。写真は、おばあちゃんがクリを剥いてくれているところですが、かつては家の裏手に栗林があってそこから拾って食べていたということで、クリが大事な食料であったということでした。その栗林も今は何本か残っているだけだということで、昔そこにクリの林があったということはおばあちゃんの話聞くまでまったくわからないことでした。村の生活が変わることで、村の風景までもすっかり変わってしまうのだということを実感し、こうしたお話を聞くことの重要性というものをあらためて感じました。

13日の午後には2日間で調べてきたことを班ごとに整理し、まとめました。写真は与右エ門さんのおばあちゃんに聞いた年中行事を模造紙にまとめているところで、これはみんなの前で発表するほか、後日、与右エ門さんのおばあちゃんにも見てもらって、よりくわしいお話を聞くようにするものです。角川の地域学ではこうしたフィードバックをとっても重視していて、主催者やヨソモノが知識を増やすだけではなく、地元の人にもそれを共有することでお互いに学び成長していくことを目指しているのが大きな特徴だといえます。発表では、地元の人、ヨソモノ、主催者がそれぞれ自分の印象に残った「あるもの」についてプレゼンテーションします。地元の人たちも発表を聞くことであらためて自分たちの暮らしを振り返る契機になっているようでした。たとえば私たちは年中行事について発表したのですが、地元のおかあさんたちが知らない行事もたくさんあって、家に帰ったら自分のおばあちゃんにも聞いてみようとおっしゃっていたのがとても印象的でした。おばあちゃんたちの世代がいなくなってしまうら失われてしまう行事もたくさんあるということに地元のおかあさんたち自身が気づいて、その前に伝承を残しておこうという機運が生まれたことは、とてもすばらしいことだと思いま



1月13日午後
「あるもの探し」の発表準備
(調べたことを表やカードにする)



1月13日午後 「あるもの探し」の発表
(調べたことを発表、みんなで共有する)



地元のおかあさん達が食について発表

した。

発表は地元の子供達もおこないました。写真の子供は与右エ門さんのおうちについて発表しているのですが、建物の一部が築200年以上たっていることにとても驚いた様子でした。当たり前のように見ていた風景に、長い歴史がこめられていることにびっくりしたようです。こうした経験をひとつずつ積んでいくことで、子供達の地元に対する見方も変わってくるのではないかと思います。最後には地元のおかあさんたちも食について発表し、



地元の子供たちも発表

料理についての説明はもちろん、食材の採集や料理にまつわるエピソードなども聞くことができました。自分たちのやってきたことを言葉にし、発表することで、ふだんの暮らしを再認識し、相対化するよい機会になっているように思えました。

最終日の14日には雪の里山をカンジキを履いてトレッキングしました。狩猟の際などにはこうした雪山に登るということでしたが、雪が深くて漕いでも漕いでも先に進まず、想像していた以上にずっと大変でした。地元の暮らしを頭で理解するのではなく、身体で知るよい機会になったと思います



角川の聞き取り調査から～里人との出会いと考えたこと（今石）～

参加の動機
民俗学＝
かつての暮らしの全体を知ること、
現代的な問題に対する答えを探る

↓

過疎化、高齢化、少子化など、
切迫する村の現実に対応できるのか

安食時子さん(2007年12月15日)
山菜やキノコの採集など、山の暮らしについて



斎藤久一さん(2007年12月15日)
狩猟を中心とする山の暮らしについて



参加者の声

早坂成美さん(高校1年生)
「知っている話もあったけど、
知らない話もあって勉強になった」

→ 村のことで知らないことがある
村の外の人がどんなことに興味を持つのか

聞き書き

ヨソモノが行うことのできる聞き書き

↑↓

地元の人が行うことのできる聞き書き

→ バランスよくふたつの視点を
取り入れる必要性？

角川の子供、若者たち

→ 地元に残ったり、Uターンする若者が多い

↑

都市部との違いを価値の優劣ではなく、差異
として受け止める視点